

第4章 大学における学外実習教育の現状と課題

明治大学農学部 竹本田持

(1) わが国における農村型WHと大学における実習教育の位置づけ

これまでみたように、農村におけるWHは、人々（多くの場合は都会で暮らす人々）が農村へ出かけ、農作業を手伝いながら平時とは異なった環境でリフレッシュすることで成立する。受け入れる農家側にとっては、農作業の補助的労働力を確保するという実質的なメリットとともに、多くの人々と交流することで満足感や充実感を得ることができるから、短期的視点で経済的バランス・シートがマイナスの場合でも、外部経済的な「交流の効果」を積極的に評価することで取り組まれることがある¹¹⁾。また、結果的にWHの受入が新規直販ルートの開拓に結びつくことも少なくない。

ところで、農村において農作業を手伝っている若者のなかには学生が少なからず存在する。彼らは、WHでの参加者もいるが、夏期休業など長期休暇中のアルバイト、交通費や宿泊滞在費などの費用を全額自己負担して農作業体験をしている人もいる。そして、大学農学部や農業大学校などの実習・研修科目として農作業を手伝っている学生も含まれている。農作業を手伝い、農家と交流するという点では、彼らとWH参加者との違いはそれほど大きくないだろう。

本稿では、明治大学農学部農業経済学科における学外実習の現状を紹介し、農家と学生の交流のあり方を考察する。また、農家側が主体的に学生に体験をさせようとしている事例についても補足的にふれる。なお、本稿の内容は明治大学とは一切関係なく、筆者の個人的な見解である。

(2) 大学における実習教育

大学農学部には付属農場が設置され、学生実習や実験・研究に使われている。農学部の学生といっても農家出身者は少なく、農家に生まれても農作業を手伝ったことのない者が多いので、全体としてみれば農作業経験のある学生は極めて少数派である。これからも「農学＝実学」というとらえ方を否定されることはないだろうが、入学前も卒業後も農業とは無縁に生きる者が多数派というのが明治大学農学部の実態である。

こうした現状から、学生に対して農業生産の現場を見せること、農作業を体験させることは極めて重要であり、付属農場の果たす役割はますます大きくなっている。一方、実験室における実験・研究の成果を圃場で検証する、あるいは圃場で得られたデータを実験室での実験・研究に反映するため、付属農場は農学部にとって不可欠の施設であり、農学部の存立基盤とでもいえるものである。

さらに、付属農場には生産農場としての機能も求められる。それは、農業生産の現場にできるだけ近い状況をつくるのが学生実習や実験・研究にとって有益であることにもよるが、大学の経営サイドから「広大な土地を利用する付属農場なのだから、黒字にはならないにせよ、ある程度の粗収益をあげるべきではないか」という要請が出されやすい背景もある。とはいえ、付属農場は、場所が中心キャンパスと隣接しているか離れているかに関わらず、学外から見れば同一組織内の施設であり、具体的な作付計画や販売計画、作業計画等に関する意思決定は現実の農業経営とは大きく異なる。また、農業経営の多くが「家族」を基礎に営まれているとすれば、「家族」という要素を付属農場に取り入れることは不可能である。

このように、付属農場での実習には限界があり、農業経営・農家生活の実態、農村の現状を学ぶという観点からは不十分であると言わざるを得ない。そもそも、そうした役割まで付属農場に求めるのは筋違いで、技術系の学科として考えれば、実験室レベルの技術を圃場に適用する場として必要不可欠であるとともに、学生実習としては圃場での個々の作業を体験する、あるいは機械や施設等を実際に目にしたり操作したりすることで目的を達することができよう¹³⁾。

ところが、同じ農学部でも農業問題や農村問題を社会科学的に学ぶ農業経済学科では、現場を「見て」「体験して」「考える」という機会が必須である。学生が農村に出かけ、農業経営・農家生活に入り込むことが極めて有効であり、そのことを通して講義やゼミでの学習に対する理解度が増し、問題意識も醸成されることになるからである。この点について、その効果を数量的に示すデータはないが、最近実施した学生に対するアンケート調査結果をみても、学外での実習や研修に対する満足度は極めて高く¹⁴⁾、農業経済学科の特徴の1つともなっている。

(3)カリキュラム上の実習・研修科目

明治大学農学部農業経済学科では、1年生に学部共通の「農場実習」、2年生に「ファームステイ研修(国内)」「ファームステイ研修(海外)」、そして3年生にゼミ単位に行う「農村調査実習」という3つの実習科目を設置している¹⁵⁾。

1)農場実習

「農場実習」は前期に行う教室での講義、夏期休業中に行う付属農場¹⁶⁾での2泊3日の宿泊実習により構成される¹⁷⁾。教室では各学科(農学科、農業経済学科、農芸化学科、生命科学科)教員が、各学科の教育・研究内容を反映した概論的な講義を行い、学生は3科目を任意選択して受講する。夏期休業中の宿泊実習は、予定された日程のうちから希望により抽選・調整して班を編成し、各学科数名の担当教員(前期の講義を担当した教員が中心となる)が、それぞれ1人1～2班を担当して付属農場へ引率する。

期間中の基本的な日程は以下の通りである。初日の昼前に付属農場に集合、昼食および

ミーティングを行って午後から農作業を開始する。具体的な作業の指導は農場職員が行い、引率教員は学生とともに作業に従事する。入浴・夕食後、作物や家畜を含む農場全体の概要把握、当日行った作業、翌日行う作業等に関する説明、そして各人の感想や反省を中心に担当教員によるミーティングを行う。農場実習は学科別の班編成ではないので、学生相互も教員も初めて顔を合わすメンバーが少なくない。そこで、とりわけ初日のミーティングは自己紹介等によって相互交流の契機とする大切な役割も有している。

2日目は朝食後から昼食時休憩を挟んで夕方まで農作業をし、入浴・夕食後にミーティングを行う。3日目は午前中のみ農作業を行い、昼食後に総括のミーティング、そして解散となる。以前は朝食前に飼養管理作業が組み込まれていたこともあるが、畜産部門の縮小等により中止された⁷⁾。

ところで、付属農場での作業実習は夏期休業中だけであるが、過去には前期ないし後期の授業期間中に1回、夏期休業中に1回の計2回の実習参加によって単位認定していた⁸⁾。しかし、学科混合で班を編制し、授業期間中に農場実習を実施すると、各学科の学生が毎週少しずつ実習に出かけていることになる。これでは、毎週行っている実験科目に全員が揃う機会をつくることができないといった問題点が実験科目担当者から提起された。

時間割の調整や弾力的運用などによる対応が困難な事情から、授業期間中の実習は中止されたが、このことは生産現場での実習のあり方を検討する材料の1つとなるのではないだろうか⁹⁾。後に述べるように本稿で取りあげる「ファームステイ研修」は農繁期に実施することにしているため、作物によっては授業期間中に設定せざるを得ないことが多い。四季豊かなわが国において学生に農業生産の実態を修得させようと考えれば、それが大学の学年歴からみて不都合となる事態が生じるのも当然である。

農学部は、社会科学系の農業経済学科を除いて実験室での実験科目が多い。実験は毎回の積み重ねが重要であることは間違いなく、とりわけ基礎を学ぶ1年生は欠かさず実験を行うことが不可欠であろう。しかし、それゆえに農場実習を夏期休業中だけに限るのでは、今度は農場実習という面では問題なしとは言えないと思う。

上述したように、援農や農作業体験、収穫アルバイトなど、学生が農村に出かけていく機会の実習・演習に限ったことではないが、授業期間と農繁期との関係については何らかの工夫が必要である。また、後述するように農繁期に実習や演習を行うことは、受入農家にとって負担になっている面があり、今後の検討課題となろう。

2) 農村調査実習

各ゼミ単位に行われる3年次の「農村調査実習」は、各ゼミの予定や都合、研究テーマによって内容、時期、場所が決定される。旅館等に合宿し、行政・農協等や各農家での聞き取り調査やアンケート調査を実施するゼミ、農家に分宿して農作業を手伝いながら経営や技術、生活に関連した聞き取り調査を実施するゼミなどがあり、海外調査を実施するところもある。海外調査の場合も基本的には国内調査と同じだが、後述する「ファームステイ研修（海外）」と同様に農家分宿等は難しいため、関係機関への訪問や聞き取り、農家

訪問などが中心となる⁽⁹⁾。期間は、多くのゼミが5泊前後である。

一例として筆者のゼミにおける農村調査実習について紹介しよう。他のゼミでは農村調査実習は基本的に年1回であるが、筆者のゼミでは年2回実施している。

夏期休業中に行う通常の農村調査実習は、1979年から同じ地域で実施している。内容は以下で紹介する「ファームステイ研修（国内）」とほぼ同じで、収穫最盛期の農家へ分宿し、農作業を手伝いながら事前に作成した調査表に基づいた調査を行う。調査内容は、農業経営の概要、農家生活の現状、および各学生が関心のある項目である。期間中の一晚、受入農家、農協担当者、学生が集まって交流会を行っている。また、農家分宿の前後に行政と農協の担当者からの聞き取り調査、農産物加工工場の見学などを行い、全体の期間は一週間強（8泊程度）である。

これとは別に、夏期休業中の実習地とは異なる場所へ行き、農業・農村の現状についての理解を深めるような試みを6年前から始めた。行政や農協での説明と質疑応答、農業関連施設の見学を主体にしたもので、宿泊（3泊程度）は合宿形式をとっている。ただし、現地との交渉で、うち1泊を学生数人ずつでの農家分宿に変更した。夕方、集落の公民館に受入農家、行政担当者、そして学生が集まって夕食を兼ねた交流会を行い、終了後に農家へ移動して農家と学生とが懇談する。翌日、朝食を各農家でいただいてから辞去し、調査・視察を続けるのである。1泊だけの宿泊であるが、いや1泊だけだからこそかもしれないが、学生にとっては夏期休業中の農村調査実習とは違った意味で印象深い交流体験ができるようである。

夏期休業中の約1週間の農家分宿と、前期に行う1泊だけの農家分宿は、かなり意味合いが異なる。その最大のものは宿泊費である。夏期休業中は「ファームステイ研修（国内）」と同じく受入農家に対して宿泊に関わる経費を支払っていない。これに対して、1泊だけの農家分宿では農作業の手伝い等は体験的なことを除いては行わないため、朝食代とシーツ洗濯代に相当する程度の僅少額を支払うこととしている。

3)ファームステイ研修(海外)

海外での「ファームステイ研修」は、理想的には名称通り農家分宿し、農作業を手伝うという国内と同じ形態で実施することである。しかし、農家が民宿経営しているところに「宿泊客」として滞在し、農場を案内してもらうことなら可能であろうが、家族の一員として滞在し、農作業を手伝うことは容易なことではない⁽¹⁰⁾。また、農家による民宿経営が一般的でない国では、「宿泊客」としての交流もできない。

現在、「ファームステイ研修（海外）」を実施しているのは台湾であり、明治大学の協定校である国立台湾大学の全面的協力によって、大学での講義、周辺農村の農家訪問や関連施設見学、そして全期間中にわたりサポーターとなって各学生についてくれる台湾大学農学部学生との交流を内容としている。実施は年末近くになってからなので、参加者が確定してから実施までの間、台湾農業についての知識やコミュニケーションをとるための語学など、定期的に集まって事前学習を繰り返す。「ファームステイ研修」ということでは

同じ科目であるが、海外に出て協定校の学生との交流もあることから、国内班と比較して事前学習に力を入れている。

ところで、このように外国の協定校の協力によって研修を行う場合、逆に相手側も日本に来てみたいという希望を持つのは当然である。高校の姉妹校交流などでは、ホームステイによる相互交流が行われていることが多い。ホームステイは行わないにしても、準備や案内等で担当教員の負担が大きくなることは避けられない。長期的に交流を深めていくと、受入という問題が発生することになる。

外国での研修は、オーストラリアやニュージーランド、カナダ等で募集しているWH⁽¹²⁾のうち、農場で受入があるものに参加し、その参加証明をもって体験実習の単位として認定するなど今後検討すべき課題ではないかと思う。その際、学外での語学研修経験、英語検定の級やTOEIC、TOEFLの点数による単位認定が行われるなど、学外での経験や資格を大学が活用するようになっていることも参考となろう。「ファームステイ研修（国内）」も同様であって、今後は国内のWH参加についても考慮することになるのではないだろうか。

(4)ファームステイ研修(国内)について

1)これまでの経緯

さて、以下では明治大学農学部農業経済学科における学外での農家宿泊実習「ファームステイ研修（国内）」について紹介する。筆者が把握しているのは1970年代半ば以降の実態についてである。

当時の実施地域は、静岡県榛原町（茶）、山梨県甲府市（もも）、長野県南牧村（高原野菜）の3カ所であった。作物から判断されるように、お茶は大型連休（ゴールデンウィーク）中、ももと高原野菜は夏期休業中に実施するもので、授業との競合がない時期・場所が選ばれていた。1学年の学生数は現在とほぼ同程度ないし若干多いくらいだったので、学生数に対する箇所数は相対的に少なかった。1カ所あたりの受入学生数は15～20名程度で現在よりも多かったが、それでも希望者の全員を受け入れることは難しく、説明会への欠席者や遅刻者を排除して調整をしていた。休暇中に行われる実習なので、参加申し込みをするのは積極的な学生が多かったはずであるが、こうした措置により、結果的にはさらに意識の高い、やる気のある学生が選抜されていたことになるのではないだろうか。

その後、長野県南牧村（野辺山地区）では以下のような問題が発生した。同地区では高原野菜の収穫最盛期と大学の夏期休業が一致するため、当時は隣接する川上村などとともに学生アルバイトを多く入れている地域の1つであった。実習として訪れる学生は、期間は短いものの同じ大学生であり、見方によっては無償労働力である。当時、アルバイト学生は各農家に宿泊して家族の一員として働いており、部屋さえ確保できれば学生が1～2名増えても大した負担ではない。つまり、受入農家には大きなメリットがあった。

しかし一方で、実習する学生の側からみれば3つの点で問題があった。第1は、学生は「実

習」，農家は「無償労働力」という意識で接することである。これでは，期間中ひたすら働く（働かされる）だけに終始してしまう可能性が否定できない。農家自身，この時期に1年分の農業粗収益をあげなければならないから，それこそ猫の手も借りたいくらいの忙しさであり，学生とゆっくり話すこともできない状況だった。第2に，一緒にいて同じことをしているアルバイト学生は賃金を受け取るのに，実習学生は単位にはなるにせよ「タダ働き」になってしまうことである。「実習とアルバイトは違う」と頭では理解していても，若い学生にとっては納得することは難しい。第3に「実習生だからといって“タダ”では可哀想」ということで，実習最終日に学生に対して現金を渡す農家があったことである。いくら「これは内緒だよ」と言い含めてみても，結局は明らかになってしまい，学生の間に不公平感が広がってしまった。

こうした問題を抱えたまま実習を継続することは困難であり，野辺山地区での実習は数年間で中止となった。以後，長野県長野市篠ノ井地区（りんご）が加わり，ももの収穫作業をしていた山梨県甲府市は，山梨市や勝沼市を経て現在の一宮町（現・笛吹市）に引き継がれてきた。また，①臨時定員増措置による学生数増，②実習参加希望者割合の向上，③一地域での受入学生数の減少，④現地の事情による受入中止などにより実施地域の増加，変更があった⁽¹³⁾。

現在の実施地域は，時期順に①静岡県榛原町（茶），②長野県松川村・池田町（花き，野菜等），③愛知県田原市（施設園芸＝花き・果菜類，養豚），④山形県天童市（さくらんぼ），⑤山梨県笛吹市（もも），⑥福島県喜多方市（野菜），⑦栃木県那須塩原市周辺（米，なし，野菜，花き，酪農）の7カ所である。このうち，静岡県榛原町は30年以上にわたって継続している。

2) 具体的内容－学生の選考，受入農家の選定，実施日程など－

実習参加学生の選考等は，以下のような方法で行う。

- ①全体説明会を実施し，各実習地担当教員が概要を説明。説明会までに各実習地へ連絡をとり，実施が可能であるかどうか，受入可能人数，時期等を確認する。
- ②学生より参加申込書を提出させる（新たな試みとして，紙ではなくEメールによる申し込み方法を実施した）－内容は，氏名，住所，希望地（海外か国内か，国内の場合は第一希望と第二希望を記入）。
- ③全体説明会において実習地を決定（第一希望で予定人数を上回ったところは積極的に第二希望に移る人を募り，それでも人数オーバーの場合は抽選）。海外については，費用の一部自己負担があり，外国での研修となるため，担当教員がひとりひとりを面接して意志確認を行う。
- ④以後，各実習地単位に何度かの説明会を行い，注意事項の伝達，現地についての概況説明，意志確認等をする。

こうした準備を経て実際の研修を迎えるが，実施までに開催する数度の説明会を欠席ないし遅刻した学生については参加を認めないなど，厳しく対応するようにしている。それ

でも、作業の辛さから荷物をまとめて夜中に徒歩で帰宅する（翌朝、農家の方が起きてこない学生の様子を見に行って初めて気づく）、期間中ずっと首を振って意思表示するだけで一言も口をきかない、極端な好き嫌いを主張して手作りの料理を全く食べない、酒を飲んで暴れる、近隣の農家で研修している学生と待ち合わせて夕食後に農家を抜け出し深夜まで帰らない、携帯電話で情報交換して他の農家との作業内容や待遇の違いについて文句を言うなど、常識では考えられないようなトラブルが発生する。こういうことが起こった地域の中には、翌年からの受入を断ってきたところもある。

受入農家の選定は、多くの場合は現地の農協（営農指導担当部署）に依頼している。力仕事为主となる作物をつくっている地域では女子学生を受け入れてもらうことが困難であり、逆に細かい仕事を中心の農家では女子学生の希望が多くなる。農作業の内容とともに問題となるのが、家族構成と家の設備や雰囲気である。男の子ばかりの家では、設備や雰囲気が女子学生向きではないと農家側が判断して男子学生を望むし、逆に女の子ばかりの家では話し相手にもなるので女子学生を望むことが多い。子供たちが成長してすでに他出してしまった家では、男女の差はあまり気にしないようで、むしろ女の子だけだった農家が「うちのお父さんは男の子と一緒に働きたかった」ということで男子学生を望むこともある。子供の小さい家では、女子学生を望むことが多いようである。また、極めて少ない事例ではあるが、後継者のお嫁さん候補の一人として女子学生を望む農家もあり、実際に卒業後に実習した農家へ嫁いだ者もいる（この場合、実習受入時に「お嫁さん候補」として意識していたかどうかは不明である）。

どんな場合にせよ、学生の受入可否は農家側の女性の意向に強く左右される。これは通常の家事役割分担関係からみて当然のことで、他人を家に泊め、食事はもちろんのこと衣類の洗濯までお願いすることを考えれば、家事のほとんどを担う女性が賛成しなければ受入は不可能だからであり、宿泊実習の最大のポイントであるといえよう。

実施中の日程は各地域によって若干異なるが、現地の農協会議室ないし役場会議室等に集合し、昼食を食べて担当教員や現地担当者（多くの場合は農協営農指導担当者）より注意事項等の説明を行う。受入農家が集合と、開会式（顔合わせ式）を行い、各農家が学生を連れて自宅に戻って午後から農作業に従事する。

担当教員は翌日から各農家を巡回し、農家への御礼や学生への激励、健康状態についての質問等をする。期間中に全体で集まって受入農家との懇親会を開いてくれたり、そば打ちなどの農産物加工体験などをさせてくれる地域もある。

最終日には初日と同じように集まって閉会式を行い、受入農家と学生双方が感想やお礼を述べて解散する。終了後、学生は研修中の体験や聞き取った話をもとにレポートを提出する。基本的にはこのような日程で約1週間の研修を行っている。

3) 受入農家による評価

ある研修実施地域における学生受入農家の評価（感想）を第4-1表にまとめた。多くの農家は学生に対して良い評価をしているが、No.19のように極めて厳しく評価している農

第4-1表 ある実施地域での受け入れ農家による評価(感想)－2003年度、2004年度－

No.	研修学生について		感想	研修学生の受け入れに 農家側が期待すること
	良かった点	悪かった点		
1	女子学生だったため、わが家に花が 咲いたようだった。農作業の繁忙期と 重なったために大いに助かった。	なし	家族同様の生活で、別れがづらい。 農繁期と研修期間がピッタリ合ったの で、忙しさのあまり学生との会話が不 十分だった。	今の若者の考えが理解できること。
2	人柄が素直で仕事に集中してよく やった。	特になし	小規模農家だったので、せっかくの貴 重な研修が実のあるものだったか心 配。	何事にも集中することの出来る人でな いと事故になる。気さくで何でも話の できる人間。
3	家族、地域の人々と明るく積極的に接 する態度に感心させられた。作業の 手伝い等についても快くやってくれて 大変助かった。	特になし	初めて受け入れてみて、食事、生活 サイクル等の不安があったが、わが家 の生活にとけ込んでくれて、特別扱い もせずに済んでホッとしている。	受け入れ先の家庭にとけ込もうとする 気持ち。
4	どんな仕事でも非常に興味をもち、一 所懸命働いてくれた。何よりもさわや かでハキハキしていて、何を言っても 「ハイ」と返事をしてくれ、挨拶の出来 る素晴らしい学生だった。	特になし	娘と同じ年頃の子を受け入れるのに 当たって、最初はやはり仕事を与える のに戸惑いも感じた。しかし約1週間 の研修が終わってしまうと思うと楽しさ だけが残っている自分にビックリして いる。	農家の仕事に触れて学生が逆に何か を感じてくれれば良いと思う。
5	一生懸命に仕事をしていて。	特になし	仕事が慣れた頃に研修終了なので、 1週間はあっという間だった。	自己主張が出来る学生。明るい人。
6	とても真面目で素直に何でもよく聞き 入れ、仕事に対しても意欲的だった。	特になし	家の中にとけこみ、家庭的なお付き合 いをした。このような学生なら、今後も ファームステイ研修を続けても良いか なと思った。	
7	一生懸命に仕事をしていて。	特になし	少し短い。	もう少し積極的だと良い。
8	良く気がつき、丁寧に仕事をしてくれ た。家の中のことも積極的に手伝って くれ、とても助かった。	特になし	自分の子どもたちのこれからの進路の 話なども聞くことができ、私たちにも子 どもたちにも良い刺激になり参考に なった。	これからの農業、食の大切さを考えた 社会人になってほしい。
9	イヤな顔もせずニコニコと作業してく れた。挨拶などの点でもさわやかで何 も言うことはない。何事にも一生懸命 取り組む姿が素敵だった。	なし	幼い頃からの教育(生きる力)が良 かったと見えて、人間的にも働くとい う点からも100点満点をあげたい。	人間としての心が備わっているか、自 立しているか、責任感があるかなどの 点を見させてもらった。働かせようと して受け入れているわけではないので …。
10	素直で明るい。作業態度も良くできて いた。	なし	初めて受け入れたが、作業態度も良く 生活面もしっかりしていたので、わが 家としても良い経験をさせてもらった。	学生に農業を理解してもらうこと。
11	明るく勤勉な学生だと感心した。明大 生の心意気も感じた。家族の一員に なってもらい、一人娘の妹ができたよ うだった。	なし	年間通して忙しい時に大助かりした。 わが家としても有意義な1週間を体験 できた。	農業に関心を持ってもらい、農業関 係で活躍してくれることを期待して いる。
12	何事にも前向きに「次は何をします か?」「明日はどのような仕事です か?」など、積極的に仕事をしてくれ た。	なし	農家の仕事は思っていたより力を使 い、また機械に使われ、終わった時は 腰や腕が疲れていたようだった。	疲れた。でも良い思い出になる。若い 人の考えも素直に聞け、自分や家族 にとって刺激となった。仕事はか どった。
13	明るく、社交的。思っていたよりマジ メ。将来性が豊かそう?	少々	1年中で1番忙しい時に研修に来ても らい、大変助かった。	出身地、家庭の特性が異文化交流と なり、新しい将来の農業を少々学べ た。
14	何事にも素直に頑張ってくれた。	タバコの吸い過ぎに気を 付けて下さい。	自分の子どもたちも、今回の学生によ うな頑張り屋であってくれたらと思っ た。	夜、世間話も良いが、農業や社会に ついて話し合う課題があっても良いの ではないか。
15	疑問がある場合は積極的に質問する など、常に学ぶという意識が強かつ たように思う。	早朝の仕事は少し苦手 だったようだ。	あつという間だったな…ということ。	若い人が農業の実態を知って、少し でも感心を持っていたらいいことを期 待する。
16	すべてが初体験にもかかわらず、積 極的かつニコニコと笑顔で作業に取り 組んでいる態度は良かった。	声が小さい。はっきりと返 事をしないことがあった。 自分から質問することが 少なかった。	農繁期と受け入れが本当に重なって しまっ、正直なところ少し疲れた。学 生に対してのケアが十分だったか心 配。	明るく、楽しく研修をやっていること を意志を持って研修に望んでくれ れば良い。そして、作業で少しでも手助 けになれば…。
17	農業、農政に興味をもち、疑問のある ことは質問し、とても積極的だった。	体調を崩してしまっ たが残念だった。健康には 十分に注意してほしい。	農業を理解しようとする前向きさがあ る学生で将来を期待している。	農政や農業関連の業務に携わる時 に、常に農家の目線忘れずに取り 組んで欲しい。
18	作業に対し積極的に行動し、また作 業内容に対する理解も早く、的確で 非常に助かった。	研修後半、少し注意す るとヤケになって作業に当 たるような面が少し見受 けられた。	受け入れ農家に「すべて普段通り」と 言われるが、やはり他人が入ること でそういうわけにはいかない。結構、疲 れる。	労働の助けになり、また農業の良き理 解者となってくれることを期待する。
19	特になし	日常生活がなってい ない。	何を目的に参加しているかわからな かった。	研修の趣旨をもっと理解して、目標を もって参加してほしい。

資料:研修初日に各農家へ配布し、最終日に回収したアンケート調査結果より。

家もいる。これは農家の問題ではなく、参加した学生の資質に起因するものであり、それを担当教員がどのように見抜くかは今後の課題であろう。

また、この評価からわかることは、農繁期に受け入れることの是非である。「忙しい時に大助かりした (No.11)」、「一番忙しい時期に来てもらい、大変助かった (No.13)」という作業面での積極的な評価の一方で、「正直なところ少し疲れた (No.16)」、「結構、疲れる (No.18)」という精神面・肉体面での消極的な評価、そして「忙しさのあまり学生との会話が不十分だった (No.1)」、「学生に対してのケアが十分だったか心配 (No.16)」という農繁期ゆえの課題があげられている。上述した高原野菜産地における学生アルバイトとの共存状態ほどではないにしても、農繁期にゆっくりと話すことは難しい。

また、各農家は「学生を育てる」、「若い人たちに農業を理解してもらおう」という姿勢で学生を受け入れていることにも注目すべきであろう。「学生が何かを感じてくれれば良い (No.4)」、「学生に農業を理解してもらおう (No.10)」、「農業に関心を持っていただけることを期待する (No.15)」、「農業の良き理解者となってくれることを期待する (No.18)」という意見は、大学側としては頭の下がる思いである。「働かせようとして受け入れているわけではない (No.9)」との意見は、書いてはいなくても他の農家も考えていることであり、人づくりに大きな貢献をしているととらえて良いのではないだろうか。

4) 参加学生の感想

ファームステイ研修に参加した学生は、終了後に作業日誌（毎日の作業内容と簡単な感想を記したA3版用紙1枚）と感想文（2,000字程度）を提出する。受入農家のようにアンケート形式で感想等を調べたことはないので、感想文の中から文章を抜粋して、参加学生の感想についても触れておく。

第4-2表は、前掲の第4-1表に示した農家19戸へ入った学生感想文からの抜粋である。なお、表の脚注にも示したように、各農家No.と学生は同じ順序で並んでいる訳ではないことに留意されたい。多少乱暴ではあるが、「全体の感想」「家族についての感想」「不安や課題」という3項目に分けて整理した。ただし、最後の学生は全体の感想が家族について述べているので、2つの項目を合わせた形にしてある。家族についての感想には、地域について述べているものを含んでいる。

学生感想文は、当然のことながら氏名が明記され、内容は成績とも関連するのではないかと考えて書いているはずである。また、受入農家にも配付することを事前に学生に伝えてあるため、無記名アンケートによる率直な感想とは異なることは避けられない。こうした限界を念頭に置きながら、感想を見ることにする。

全体の感想はおおむね高評価で、現場に触れることによって教室での講義内容を具体的に理解できるようになった、あるいは以後の講義に対する前向きな姿勢につながるというような「農学部学生」という立場からの感想がある。また、スーパー等で普段目にする農畜産物に対する見方が変わるという「消費者」の立場からの感想がある。逆に、農家出身者として将来の方向性が見えてきたというような「生産者」の立場からの感想、そして

第4-2表 ある実施地域での参加学生の感想—2003年度、2004年度—

No.	全体の感想	家族についての感想	不安や課題
1	黒板を使った授業より実際に農作業をすることで得ることは大きいんだなと思った。農業というものはどういふ産業かということ考えたときに、自然の生命活動を利用して生命に不可欠な食料を生産する、生命産業であることを直に感じることができた。	家族のつながりの強さに感動した。都会に比べ時間がゆとりを持って感じられ、家族1人1人が自由というか、自分達のペースで生活を楽しんでいるという、そんな感じがした。農家の方々にはとても優しくしていただき、人の心温かいうか温かさをすごく感じた。	実際に経営している農家にお世話になることで、農家の方たちの僕達に対する対応にとても不安があった。また、農家の一人として仕事に従事できるか？しかもお米の収穫の最盛期ということもあり不安は大きかった。
2	今の農政がどういふものではなく、現実が厳しいならその中で農家も努力しなければいけないという言葉が印象的だった。現実の農業の姿を目の当たりにして、教室で勉強していたことが現実味を帯び、またこれからの勉強にも生かしていけることばかりだった。	勉強の面だけでなく、家族の暖かさや絆を垣間見られて、たくさん大事なことを学び、有意義な時間を過ごすことができた。	倉庫には初めて見る機械がずらりと並んでいて、本当にここは農家なのかと心配になったが、倉庫に積んである袋詰にされたお米の量も半端なくあり、私は一瞬にして農家のイメージが変わった。
3	ここまで来るのには大変な苦労があったと思う。その苦労を少し知っただけで終わってしまったが、とても勉強になった実習だった。	ナシや梨、夕飯などいろいろごちそうになりました。おばあちゃんはおやつをくれたり、奥さんは10時くらいまで仕事をしてくれていての2人飯の用意をしてくれ、いい家にお世話になってよかった。	手の皮がむけたり、筋肉痛になったり大変だったが、その中でも結構楽しかったのは、作業中にすぐほりこぎが舞い、それを吸ってしまい風邪をひいてしまったことだ。その時、何十年も農業をやっていることの大変さが少しわかった気がした。
4	これからの世代の人たちの目を農業にむけるのは簡単なことではないが、しかし、農業がこのまま衰退してしまうことは本当に恐ろしい。とにかく農業に触れる機会を増やすべきだと思う。都会の小学校でも農業体験というのをどんどんやるべきだと思う。		僕の実家は農家だが、ほとんど農業、農作業に触れることがなかった。正直農業に対してあまりいい考えを持っていないが、今回ファームステイをしてみても、農業の楽しさが少しだけわかったと思う。
5	今後の農業、特に家族経営をよりよいものにしていくためには、私たち非農業従事者の理解と、JAや企業の今以上の今後を見据えた活動が必要である。それと同時に農業に対する意識改革も必要になってくるだろう。	どの作物の作業を見てみても家族の重要性がうかがえる。長年一緒にやっていけるからこそ培える技術と信頼があるだろう。誰か一人で欠けたらこの連携は生まれないだろう。ここに家族経営の重要性がある。	農業を農業としてとらえるのではなく、1つの経営産業というように、今あるイメージを変えなければ農業が今以上になることはないのではないだろうか。失敗な言い方になるかもしれないが、お金を得る(儲ける)手段の1つとしてとらえなければいけない時代なのかもしれない。
6	ファームステイ研修を終えて、自分の人生の中でかなり意味のある何かを得た気がする。農作業は初体験だったので、かなり心配したが、丁寧に教えてもらい、一生懸命にできたと思う。	自分にとって第2の家族ができたようで、この上ない喜びが味わえた。いっしょ遊びにおいでという言葉はとても嬉しかった。機会があればまた必ず行きたい。	5泊6日ということ長いかなと思ったが、あつというまに過ぎてしまい、自分としてはもう少し居たかった。
7	私は、マスコミの偏った情報に惑わされることなく、正しい判断ができる一消費者でありたいと強く思った。おじいちゃんやおばあちゃんまでもが腰を曲げて一生懸命作ってくれていること、作物ができてからには、私のしたような小さな作業など道が及ばないほどの作業がいくつも積み重なっていること、天候など自然に左右され、全く思い通りに行かないのだということを知ることができた。	みんな、とても明るくて優しく、テレビをみるよりも1日のことを話さず、吉きき物を大切に、嫌な事は一切口にしない、とても温かい家庭だった。また、親戚や近所の人とも本当に仲が良く、おすそ分けが当然の事のうに行われていたことも素敵だった。	農業に携わる人には高齢者が多いのに、30kgもある米を運んだり、腰を曲げっぱなしで、稲を刈ったりという重労働が多々ある。このように、生産者が弱体化していること、さらに農業は太陽の恵みであるということ、私たち消費者は忘れてしまっているのではないかな。
8	実習4日間ほどの研修であったが、とても楽しく感じた。稲の様々な側面を、ほんの一部ではあるだろうが、見て触って体験して……これへ来なければどれも一生知らないままだった。自分自身一度味わったような、そんな満足感を得ている。	ちよろちよろしてばかりで、ご家族の皆様と年様たちには、多々ご迷惑をかけたかったが、私は感謝の気持ちでいっぱいである。	名簿を見て、私は笑ってしまった。と言うより笑うしかなかった。「稲穂……?ウシ……?」水稲農家に決まった2人の親友が稲穂に話している様で、正直気が重くなった。慣性の欠けりも無いこの私が1週間も耐えられるはずがない。
9	僕の方では大変な体験ができた。	家族の皆さんに優しく接していただき、楽しい毎日を過ごせた。	最初は牛の大きさに圧倒され、作業もスムーズに行えず、迷惑をかけたと思う。
10	研修で初めて意識してわかったことは、生産者が絶えずビビリながら天候と戦い、農薬や肥料の問題と常日頃から向かい合っている農作物を育てていることだ。	人生の中で確実な経験をして、為になったと思う。このような研修ができたのも、農家の皆さんが熱心に親切にいろいろのことを教えてくれたからだと思う。	確かといふことばかりではなく、ドジもたくさんしたり、農作物に対して気をつかったりして慣れなくて辛かった部分もあった。
11	何気なくスーパーに並んでいる野菜や果物のひとつひとつが、生産者の皆さんが丹念に心を込め、自然と息を吐きながら育った「商品」であることを再認識させられた。	後継者不足、食料自給率低下が叫ばれているが、基幹産業としての農業の醍醐味や充実感を若者に何となく広めようとしている意気込みに感動した。	秋田と台風が重なり、冷たい雨が降り続く中での農作業は、思うようにはかどらず意外と重労働だった。建物の中での機具や箱詰めの出荷作業は神経を使う必要があったので気疲れした。
12	この実習を受けて良かったと思ったことは、大学入学以前より農業関係の仕事に就きたいと思うようになったことである。		田植え、稲刈り、乾燥、精米すべて機械でやっけり。手作業でできるとは思っていたけれど、期待はずれだった。
13	経済的にもとても豊かで、毎日ストレスを感じながら働いている都会のサラリーマンとはまるで逆で、農家の仕事をとても楽しんでやっていたのだと実感した。また、今の状況に満足せず、どんどん新しいことに挑戦していくことが大切だと思った。	毎日規則正しく、しかも家族みんながとても仲が良く、とても楽しい生活だった。私の家は両親ともサラリーマンで帰宅が遅く、家族みんなで夕食を食べることが少なく、それが当たり前の生活になっていた。	ファームステイをする以前の農家に対するイメージは、労働が大変で、生活も大変なものとただ漠然と思っていた。
14	今回の研修は、これからの大学生活、何を目的に、何を目標にして毎日を送るかについて考えさせられた。	農業における家族や地域の重要性も見えた。家族だからこそ重要な仕事を任せることができ、そして家族だからこそ問題を解決できる。この農家には、しっかりとその仕組みがあったように感じた。	今回の研修は残念ながらイザゴも来れなかったが、少々残った部分があったが、「施設の手入れの面で例年できないことができて良かった」というご主人の言葉が嬉しかった。
15	私がファームステイに参加した理由は、私には田舎がないからである。「ここを田舎だ」と言ってくれたご主人のあたたかい心に応えるべく、今週末「帰郷」しようと思っている。	ご主人は近隣2,000人の顔を知っていると言っていた。私はここでは誰もが向き合っている、そう感じた。向き合っているからこそ思慮もなく、子供も非行に走らない、2,000人が大きな家族のようで、この環境を羨ましく思った。	農業を種としている人の中で1週間暮らしということが全く想像できなかったが、山間地はとても静かで穏やかで、時間がゆとりと、そして速く流れていた。
16	今まで将来農業をやることにどこか不安感をもてなっていた自分だが、研修を通して実感が持ててワクワクしている。農業は厳しい時代だが、大学の中でも外でも勉強し、失敗を繰り返しながら、将来の夢を叶えるように努力したい。	実家の農業が知らない私にとって、他の農家の仕事や家族に初めて触れることができたのは貴重な経験になった。	私がお世話になった時は、稲刈りはほとんど終わりで、アスパラの出荷も少ない時で、私ができる仕事がいっぱいあったが、勉強になる仕事をいろいろ探してくれてとても感謝している。
17	1週間を通して、家族のように受け入れてくれた農家の皆さんに感謝の気持ちで一杯である。農業経済学科という環境を最大限に生かし、精一杯勉強に励むことが最大の恩返しであると信じて頑張っていく。	毎日家族団らんの時間に作業についての話し合いをしたり、休日をきっちりとしてプライベートの時間をつくるなど、無理せず、健康で明るい家庭生活を築くことに努めているとのこと、ご家族が本当にみんな仲が良く、とてもいい家庭だなと思った。	ちよろちよろのお米の収穫が終わってしまい、仕事がいっぱいあったことは残念だったが、そんな中でも模索しながら様々な仕事を覚えてもらった。
18	ファームステイで農家の生活に入ることにより、農業を農家の視点からみることができ、非常に貴重な経験になった。	親戚だけでなく地域のつながりが太く、仲がよい地域の人たちも頻りに出入りし、お茶をしながら世間話をしたり、日々の悩みを相談したりする。とても開放的で深い信頼で地域が結ばれていると思った。	
19	お世話になった農家は成功者であると思う。なぜ成功したか、その大きな要因は家族の関係だと強く感じた。経営者だけが目標を立て経営向上を目指していても、そこに気持ちよく働いてくれるパートナーと家族の協力がなければ実現は難しい。家族で苦も楽も分かち合い、生活の内容をしっかりと把握し、各自責任を持ち、意欲的に活動できるのが最高である。農業において教育問題、後継者育成、男女共同参画の実現のために最も大切なのは「家族の絆」ではないか。そう考えさせられたファームステイだった。		

注: 1) 学生が提出した感想文からの抜粋。
2) 第4-1表に示した各農家で研修した学生。ただし、農家No.とは対応していない。
3) 「家族についての感想」には、地域に関する事項を含む。

研修を契機に“いなか”を持ちたい、あるいは第2のふるさとにしたいというような感想もある。このように、どのようなスタンスで感想を述べるかによって内容が異なるが、これは体験学習をする場合の意識の多様性としてとらえるべきではないだろうか。

さらに、あえて「家族についての感想」という項目を加えたのは、それだけ多くの学生が家族について、あるいは地域について感想文の中に盛り込んでいたからである。これは当然といえば当然である。本学における「ファームステイ研修（国内）」とは農場に滞在するのであり、農場と農家が不可分であるわが国では「ファームステイ＝ホームステイ」だから、感想の中に家族が多く出てくることになる。第2のふるさとと同じ「第2の家族」という表現、家族の絆に対する感動、一家団欒への羨望などが述べられており、都市（型）生活の中で失われた人と人とのつながりについて多くの学生が何かを感じていることがわかる。このように、「ファームステイ研修（国内）」は、一方で農業・農村そして食料について学ぶのであるが、それと並んで農家のみならず、家族のあり方、生き方を学ぶ場ともなっているのである。だからといって、農家の感想にあったように「日常生活がなっていない」学生について、それを教育するものではなく、むしろ農家生活にとけ込み、家族ときちんと付き合えてこそ学べるものであろう。

最後に、必ずしも十分ではないが、参加学生が事前の不安や事後の不満などについて整理した。農家の経営内容や作業内容で、果たして自分は手伝うことができるのだろうか、生活にとけ込むことができるのだろうかというのが事前に感じる不安である。見ず知らずの家で寝泊まりをするのだから、当然の不安であろう。また、農家のイメージを自分なりに描いている、実家が農家の場合にはそれを基準に想像して不安を感じる学生もいる。事後の不満が目立つのは作業内容についてであって、収穫ピーク時にフィットしなかった学生のなかに、収穫作業以外の作業をしたことを残念がっている者がいる。農家によって、作物によって、忙しい時期は異なるし、日程や受け入れ農家を決定した後の天候で最盛期が若干前後することもある。そのため、こうしたズレは不可避であるが、感想文にはこうした事態に各農家が工夫して対応してくれていることも記されている。

(5) 農家主導による学生受入事例－「農業体験ふれあい交流会」－

こうした受入農家の評価（感想）と関連して、茨城県女性農業士会下館支部が実施している「農業体験ふれあい交流会」について補足的に触れておく。同交流会は、女性農業士会下館支部が主催し、下館地域農業改良普及センター（現・筑西地域農業改良普及センター）が協力する形で2001年の夏から始められた。女性農業士会下館支部は、筑西市（下館市・関城町・明野町・協和町が2005年3月に合併）、下妻市、真壁町、大和村をエリアとし、2004年8月現在22名の女性農業士がいる。ふれあい体験交流会は茨城県内結城地域でも親子を対象に「ふれあい体験交流会」を開催しているが、下館支部では若い女性に限定していることが特徴である。

目的は「専業農家の主婦であり担い手である女性農業士自らが、短期ファームステイを

通して若い女性の農業・農村への関心を醸成するとともに、環境変化にたくましく対応している農業と農家生活の現状の理解促進を図ること」（開催要領による）であり、受入対象は「若い元気な女性（20名）」としていて多くは大学生である。明治大学の女子学生も、第1回から毎回数名が参加している⁽¹⁴⁾。

内容は「女性農業士宅へのファームステイと農家生活体験」が基本で、期間は宿泊としては最短の1泊2日となっている。初日の昼過ぎに集合し、女性農業士会員農家の畑での農作業体験や、郷土料理づくり、農産物加工体験などを全員で行って夕食をともにする。その後、各農家（農家1戸当たり1～2名）に分宿、翌日午前中は各戸で農作業体験、昼に再び全員で集まって昼食を食べながら感想を述べて交流をする。初日に行う会員農家での農作業体験や加工体験などは、毎年相談して違うメニューになっている⁽¹⁵⁾。

この取組を関連事例として取りあげたのは、大学生が参加者の主体であることと、農家側の考え方に共通点があるように思われるからである。交流会の参加費用は「1,000円（交通費自己負担）」である。日帰りの芋掘り体験のようなものであれば1,000円くらいが適当かも知れないが、全員での農作業体験・農産物加工体験・夕食、各戸での宿泊・朝食・農作業体験、そして全員での昼食（弁当）と意見交流会というメニュー全てを含んで1,000円なのである⁽¹⁶⁾。こうした農業体験の「相場」というようなものがあるとは思えないが、1,000円は最後の昼食（弁当）代程度であろう。

参加する学生から考えてみよう。東京から下館駅までは在来線で約2時間、電車賃は往復で3,200円余りかかる。参加費や初日の昼食代、小遣いを考えると、2日間で計5,000円弱の負担になるが、農業体験をしてみたいと思う学生にとって、交通費と1泊2食を含んでの費用としては相当リーズナブルである。現在のところ、知名度がそれほど高くないことは参加を希望する側にとってはありがたいことで、宣伝PRを積極的に行うことになれば、かなりの希望者が集まるのではないだろうか。

一方、受入側からみると、この交流会は自宅に参加者を宿泊させるのであるから、女性農業士とその家族の協力がなければ成功しない。1,000円という参加費用から考えてみてもビジネスとして交流会を行っているのではないことは確かであり、これで儲けようということはない。かといって、農作業体験はいわゆる「援農」とは違い、受入側にとって実質的なメリットがある訳ではない。また、交流会の前後に参加者が地元農産物や加工品の購入をすることもない。つまり、この交流会は「若い女性の農業・農村への関心を醸成」し「農業と農家生活の現状の理解促進を図る」という女性農業士会としての人づくりを通じた社会貢献、準備期間を含めた活動そのものから得られる精神的充実感、そして若い女性との意見交換から受ける元気や発想などが女性農業士にとって大きなプラスになるからこそ続いているのだと思われる。

こうした考え方、姿勢は、ファームステイ研修学生を無償で受け入れてくれている農家と共通するものがあるのではないだろうか。交流会は1泊2日と短期間で、会員農家の経営内容が多様であるため農繁期に当たる農家は宿泊受入をせずに2日目の昼食・意見交流会のみ参加するなど、ファームステイ研修とは異なる面もある。しかし、若者のためなら、

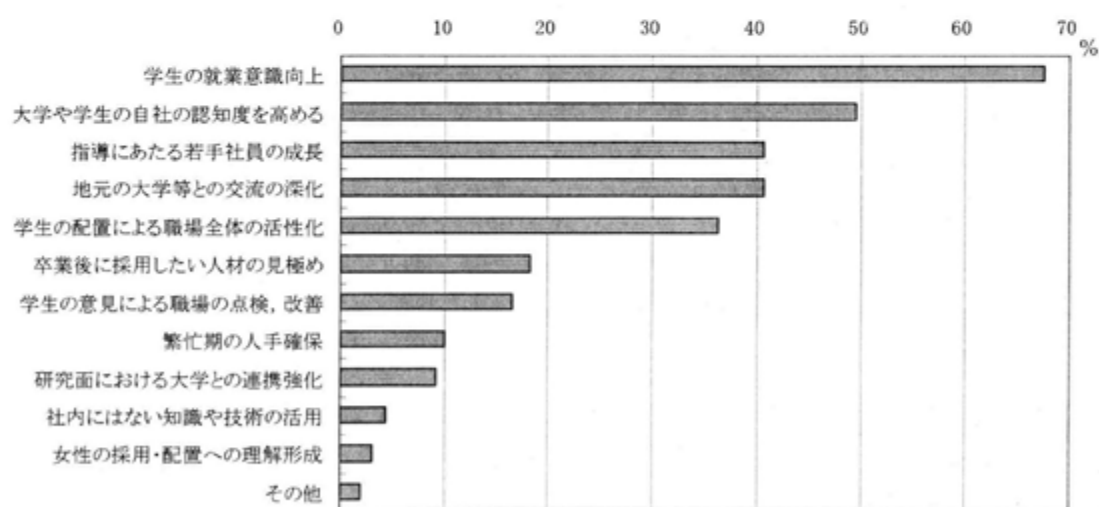
若者と交流できるなら、そして将来の農業・農村の理解者を育てるということを考えるなら、ボランティア的負担をしても協力したいと思う農家が少なくないのである。

(6) 大学生によるインターンシップの現状

教育という観点から、もう1つふれておかねばならないのは「ジョブ・インターンシップ」についてである。インターンシップとは「企業が学生を一定期間受け入れ、仕事を体験させる仕組み（アルバイトなど雇用によるものを除く。）」「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」である¹⁷⁾。本稿で触れたファームステイ研修は、まさにインターンシップの範疇に属するものである。

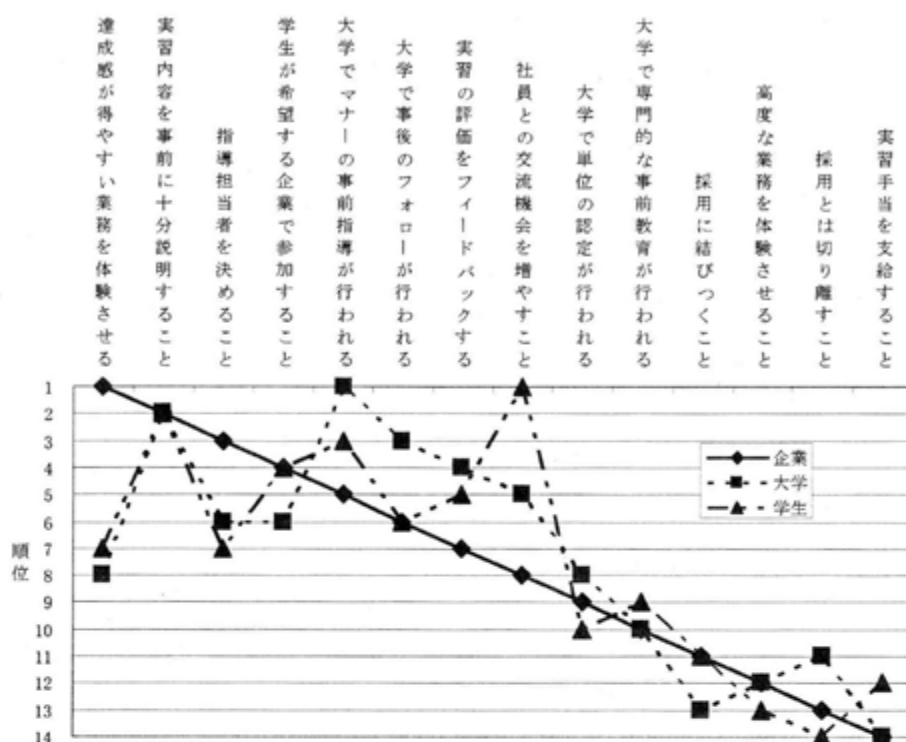
近年、各大学ではインターンシップを積極的に導入し、それを単位認定するようになってきており、厚生労働省でも研究会を組織して実態を整理している。それによると、企業が大学生を受け入れる目的は第4-1図の通りで、「学生の就業意識向上」、「自社の認知度向上」、「若手社員の教育」、「大学との交流深化」、「学生が入ることによる職場の活性化」が上位を占めている。これに対して「繁忙期の人手確保」という目的は低く、実習学生を無償アルバイトとして位置づけるようなことにはなっていない。研究会報告書では、学生からすればアルバイトやパート業務の一部などの軽易な業務体験での満足度は低く、インターンシップで行う仕事は「達成感を感じられるものにする工夫が望まれる」と指摘している¹⁸⁾。

この点に関して、インターンシップの効果を高めるためのポイントについての回答結果をみよう。第4-2図は、受入企業、大学、そして参加学生に同じ質問をしたものを、順位で区分して示したものである。これによれば、企業は「達成感が得やすい業務を体験させる」が1位となっていて、企業は研究会報告書の指摘通りに対応していることになるが、



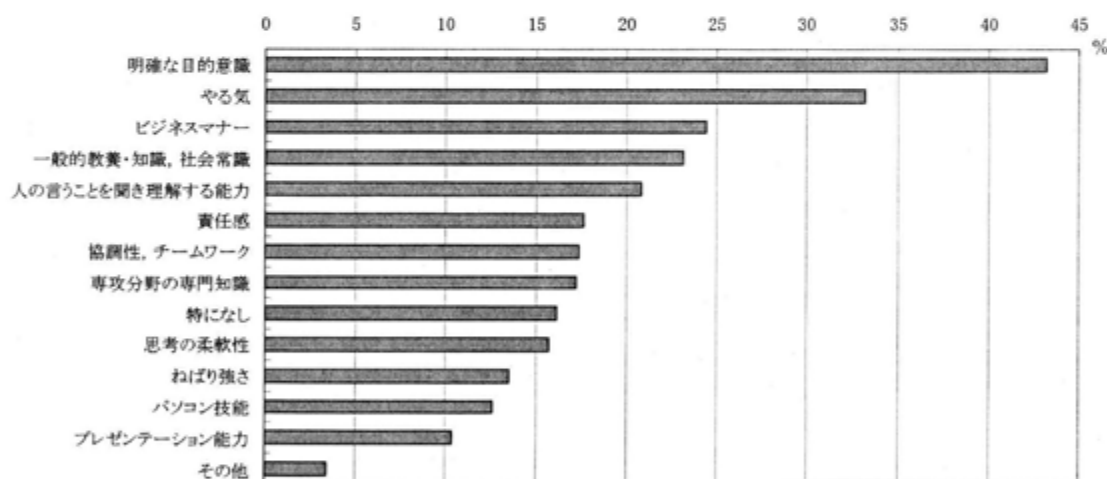
第4-1図 大学生を受け入れるにあたっての目的(企業調査、複数回答)

資料:厚生労働省、「インターンシップ推進のための調査研究委員会報告書(別冊「図表」)」2005年。



第4-2図 インターンシップの効果をもつために有効なこと(回答率順位)

資料:厚生労働省,「インターンシップ推進のための調査研究委員会報告書(別冊「図表」)」2005年。
注:選択肢は「その他」を除いてある。



第4-3図 学生に備えてほしい能力・資質(企業調査、複数回答)

資料:厚生労働省,「インターンシップ推進のための調査研究委員会報告書(別冊「図表」)」2005年。

学生の回答1位は「社員との交流機会を増やすこと」であって、仕事の内容以上に人間的なつながりを求めているのではないかと推察される。ただし、「指導担当者を決めること」が若干低い順位になっているので、少し矛盾した結果ではある。さらに、実習内容やマナーについての事前学習へのニーズが高くなっていることも特徴であろう。学生を送り出す大学は、「マナーの事前指導」を1位に挙げているが、学外研修を一度でも担当した教員

なら納得できる結果ではないかと思う。なお、受入企業からみた学生に求める能力・資質は第4-3図の通りである。マナーが大切であることももちろんであるが、やはり最も重要なのは目的意識とやる気であって、逆に言えば高い意識をもって研修する学生は、それなりのマナーで対応できるということなのかも知れない。

(7)問題点の整理

本稿では、「ファームステイ研修（国内）」を手がかりに、学生と農家との接点について実態を紹介した。若干重複することもあるが、これまで実施してきた中で感じられる問題点をいくつか指摘しておこう。

第1に、「猫の手も借りたいほど忙しい」農繁期に大学生という若い労働力が入ることは作業面で助かる面もあるだろうが、農作業だけでも手一杯の家族（特に女性）に大きな負担となる。さらに、学生の個人差がかなり大きいことも問題となる。前掲第4-1表にあるように、人間的にも、働くという点からも100点満点という学生もいれば、日常生活さえきちんとできない学生がいる。ところが、これは受け入れて初めてわかることで、期間中に病気になったり怪我をする学生とともに、農家にとって極めて大きな負担となる。とりわけ生活面の問題は、「ふれあい交流会」のように1泊2日程度のものや、宿泊を伴わないインターンシップの場合には表面化しにくいだろう。参加学生を見分けるチェックシートのようなものがあると良い。仕事上のビジネスマナーとともに、事前学習でどこまで意識を高められるかにかかっているといえよう。

第2に、アルバイト学生との関係とともに外国人研修生などの存在も影響するようになってきたことである。近年、アジア等からの外国人研修生（実態としては補助的農業労働力）の受入に積極的なところがあり、こうした地域では学生を受け入れてくれるような規模の農家に外国人研修生が入ることが多い。すると、たった1週間しか研修しない学生より長期間にわたって滞在する外国人研修生の方が仕事も覚えてくれるし、何より働く意欲が違っているから、大学生の受入継続が困難になってしまう。「教育の一環として実施されるインターンシップは、企業側が受入体制・カリキュラムを整えた上で実施される実務体験であり、アルバイトなどフルに正常の労働力として活用するケースとは異なることを明確化する必要がある」との指摘がある⁽¹⁹⁾。今後、比較的規模の大きな雇用型経営での受入が主体になるようであれば、アルバイトや外国人研修生と競合するのではなく、上手に融合できる研修体制をつくる必要があるように思う。

これと関連して第3に、学生の労働に対する見方である。「ふれあい交流会」のようにボランティア的に協力しようという意識の強い農家は、実のところ継続して受け入れてもらうことは難しい。むしろ学生受入の継続性という点で見れば、学生を補助労働力と割り切って働かせてくれる農家は、受入に積極的になってくれる。もちろん、そういうところではアルバイトや外国人研修生という第2の問題が発生しやすいのであるが、若い学生に農業・農村を理解してもらおう、いろいろなことを体験させてあげようと頑張ってくれる

農家は、受入の主体となる女性が疲れてしまって継続することが難しいのである。大学側は「家族と同様に」とはお願いしているが、No.18の農家が回答しているように「言うは易く行うは難し」であろう。食事にしても「普段よりは一品多く」ということになってしまふのが常である。

また第4に、学生が期待する作業内容と実際に行う作業内容の違いである。学生の感想文にあったように、収穫作業ではなく管理作業だけに終わってしまう場合の不満もその1つである。また、農産物直売や観光的要素を有した農園経営をしている農家では、農作業よりも販売・サービス労働が主になってしまうことがあり、期間中1度も農作業をせずに観光農園でお茶のサービスだけをしていた事例もあった。農業とは収穫という結果だけではなく、むしろそこに至る作業が大切であるし、これからの農業経営を考えれば、消費者と接することも重要な仕事である。しかし、期待したものと違う研修内容であった学生が不満を表明することも少なくない。ファームステイ研修とは何かということを改めて考える必要があるだろう。

そして第5に、受入農家および実質的な調整をしてくれる農協担当者の協力なしには決して実現できないのが「ファームステイ研修」だということを改めて指摘しなければならない。学生に大きな満足感を与え、その後の学習、いや人生にさえ大きな影響を与えてくれる研修は、キャンパスでの講義やゼミと同等の重要性を有しているが、それは受入農家の献身的な好意の上で行われているのである。現在は無償で学生受入をお願いしているが、この形態のままで継続可能かどうかについて今後検討する必要性が出てくるかもしれない。

なお、今後は海外での研修を含め、大学側のプログラムだけではなく、すでにインターンシップで行われているような受入側が主体性をもった対応も必要になるかもしれない。厚生労働省の報告書は「大学が直接関与しない企業主導のインターンシップも増加しており、その場合、学生自らが主体的に選択、参加の意思表示を行うことから、一段と明確な目的意識をもって臨むケースが多いと考えられ、学生の満足度や効果は、大学が関与するものと同程度かそれ以上となっている場合もある⁽²⁾」と指摘している。

いずれにしても、現在の農村には若い学生に農業を理解してもらおう、彼ら彼女らを育てよう、あるいは交流しようと考え、家族をあげて受け入れてくれる農家が数多く存在する。これらの農家の経営が今後も維持・発展し、継続的に多くの学生に経験を積ませることができると期待するとともに、こうした活動・交流は必ず日本農業にとってもプラスになると信じている。

注(1) ここで想定しているWHは、参加者は農業労働力を提供し、受入農家が宿泊・食事の一部または全部を提供することである。本来的な意味は「二国間の協定に基づいて、最長1年間 異なった文化の中で休暇を楽しみながら、その間の滞在資金を補うために付随的に就労することを認める特別な制度」(社団法人日本WH協会資料)とされている。

(2) 筆者自身が、農業経済学科以外の学科の実習内容について論ずることはできないことはいままでの。あえて付言するなら、可能であれば技術系の学科においても現実の農業経営で実習することが望ましいことは間違いな

いと思われる。

- (3) 明治大学農学部では、学部の将来構想を策定する過程で、2004年度卒業生（2005年3月卒業）に対するアンケート調査を実施し、そこでの結果でファームステイ研修に対する満足度が高くなっていた。
- (4) 「ファームステイ研修（国内）」、「ファームステイ研修（海外）」はカリキュラムでは同じ科目として扱い、運用上2つに分けているだけなので、科目数としては「農場実習」、「農村調査実習」と合わせて3つとなる。なお、以前は付属農場での実習が「農場実習Ⅰ」、学外での農家宿泊実習が「農場実習Ⅱ」という科目名だった。2000年度より海外での実施が始まり、「農場実習Ⅱ」を「ファームステイ研修」に変更、「農場実習Ⅰ」については2004年度より「農場実習」に改称した。なお、ここに掲げた研修、実習は全て選択科目である。
- (5) 明治大学農学部の付属農場は、2004年度末までは千葉市緑区の誉田農場、山梨県富士吉田市の富士吉田農場があったが、富士吉田農場については売却が決定した。現在、キャンパスに近い川崎市麻生区に統合した農場を設置する計画が進行しており、完成後は誉田農場の機能も新農場に移行する。
- (6) 誉田農場、富士吉田農場には、それぞれ誉田寮、富士吉田寮という学生厚生施設が付属しており、実習期間中は寮において合宿する。なお、実習期間中を除けば、両厚生施設ともに他の厚生施設と同様にゼミ合宿や課外活動に利用されている。
- (7) 畜産部門は富士吉田農場のみ。
- (8) 上述したように、付属農場は誉田農場、富士吉田農場の2農場あったので、学生は両方の農場で1回ずつの実習を行うようになっていた。
- (9) 明治大学農学部付属農場での農場実習については、若干古いものであるが、牧野玄之助「農業経営からみた大学附属農場に関する研究—その1—」『明治大学農学部研究報告』第43号、1978年所収、51～59ページに経緯が紹介されており、農場の位置づけの難しさがわかる。
- (10) 農村調査実習は多くのゼミが夏期休業中に実施しているが、海外に出かける場合は夏期休業中の交通費が極めて割高になってしまうため、前期ないし後期の授業期間中に実施することになる。
- (11) 筆者は英国でゼミ学生を農家民宿に泊めた経験があるが、農家は親切に対応してくれて、民宿経営には携わっていないご主人が宿泊の翌日に農場を案内・説明してくれた。もちろん無料であったが、このような形の交流なら可能かもしれない。竹本田持『泊まりある記・英国農家民宿』三嶺書房、1998年、116～118ページ参照。
- (12) わが国はオーストラリア（1980年～）、ニュージーランド（85年～）、カナダ（86年～）、韓国（99年～）、フランス（99年～）、ドイツ（2000年～）、イギリス（2001年～）との間でWHについての協定を結んでいる（社団法人日本WH協会資料）。一例として、オーストラリア政府でWHを担当する移民多文化先住民問題省（Department of Immigration and Multicultural and Indigenous Affairs）は、Working Holiday Maker Programとして取り組んでいる。<http://www.immi.gov.au/facts/49whm.htm>参照。
- (13) 現在の実施地域以外に、これまで新潟県羽茂町（現・佐渡市、柿）、新潟県中之島町（現・長岡市、米）、山形県寒河江市（さくらんぼ）、群馬県嬬恋村（高原野菜）、長野県中野市（きのこ、りんご）、茨城県鉾田町（メロン）、千葉県白子町（施設園芸等）、千葉県内各地（千葉県農業法人協会＝現・千葉県農業協会の会員農家）などでも実施した。
- (14) 筆者は第1、2、4回目の交流会で、2日目の意見交流会に参加させていただいている。
- (15) 日程は試行錯誤的に毎回リニューアルされており、当初の頃は全員での加工体験は2日目午前中であって、そのまま昼食・意見交流会というものだった。
- (16) 2001年の第1回目は参加費無料で行われ、さすがに参加した学生からは「無料というのでは申し訳ない」という意見もあった。その後、メンバーで相談した結果、第2回目から1,000円になった。なお、結城地域で行われている親子対象の「ふれあい交流会」は参加者1人500円での芋掘りで、掘った芋は持ち帰ることができる。
- (17) 厚生労働省職業安定局若年者雇用対策室「インターンシップ推進のための調査研究委員会報告書」2005年、2ページ
- (18) 同上書、17ページ。
- (19) 「日経連インターンシップ推進研究会報告書」2001年参照。
- (20) 同上書、18ページ。